



Doshisha University Academic Repository

同志社大学学術リポジトリ

司書合格体験記

著者	一井 佐知子
雑誌名	同志社大学図書館学年報
号	36
ページ	128-129
発行年	2010-07-31
権利	同志社大学図書館司書課程
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000012204

〈司書合格体験記〉

司書合格体験記

文学部文化史学科 一 井 佐知子

私はこの4月から、豊中市(大阪府)で司書として勤めています。豊中市はニュータウンを背景に文化・医療施設に恵まれ、環境整備もされており住みやすい街です。私が勤務する千里図書館は、豊中市の北部地域にあります。界隈にショッピングモールが点在し、駅から徒歩数分で行ける文化センター内という立地の良さから、多くの市民の方々が利用されています。豊中市は中央図書館制度をとっていないので、多少の規模の違いはあれども、各館ごとに特色のある図書館づくりをしています。千里ではYAコーナーやビジネス支援コーナーを設け、利用者への支援を行っています。

私は現在、貸出室の担当として、カウンターでの貸出・返却業務や書架整理、寄贈本受け入れ等を受け持っています。まだ入って間もないのですが、早速、展示企画やおはなし会なども任せられ、即戦力の仕事だということを実感しています。

利用者の方々の図書館に対する姿勢は多種多様で、時に厳しい言葉を受けることもあります。しかし、カウンターにいてことで利用者の顔が一番よく見えるので、ダイレクトに利用者の要望が分かる良さは大きいと感じています。

私は、元々は公務員を志望していました。しかし、司書課程を履修するうち、図書館のあり方に興味を持ち、自分もこの仕事に携わりたいと思うようになり、司書一本で受験することになりました。

司書は、あらゆる情報・知の世界を体系化して、そこから必要なソースを利用者が選別できるよう、橋渡しを務める仕事です。責任も大きいですが、資料を通じて世の中を知り、人の役に立てるといのがなよりの司書の魅力だと思っています。

私が受験したのは国立大学法人(近畿)、岡山県、そして豊中市と、他の方に比べると少ないほうです。決まったのも2009年12月と遅い方で、実習や卒論の追い込みと並行しての就職活動でした。進路に悩んだ時期もありましたが、周囲の支えや、なにより自分自身が司書をやりたいという気持ちが強かったので、なんとかやっていくことができました。

勉強方法も、科目毎に市販の参考書を1、2冊程度買って何度も繰り返す地道なやり方です。ただそれは教養科目の話で、司書の場合は専門科目、即ち図書館学関係の学習が重要です。そのため、テキストや参考文献にできるだけ多くあたり、分からない語句があればノートにまとめを作りました。また、新聞・雑誌記事やポータルサイトから図書館関係のトピックスをさらうようにして、今どういった事が図書館界で話題になっているのかを知るように心がけました。これが可能であったのは、きちんと情報環境が整っている同志社という環境のおかげだと思います。特に、2回生の頃から勉強会に通っていたので、そこから先輩諸氏を通じて多くの情報を知ることができたこと、同じ司書を目指す仲間と話せたことはとても心強かったです。

受験される皆さんに共通していることだと思いますが、司書を目指すと言ってもそれを理解してもらえないことが多々ありました。司書＝司法書士だと言われ

たこともあります。では何故そう言われるのかと言えば、やはり司書という職業やその役割がまだまだ浸透していないからです。昨今、資料の電子化の是非が問われていますが、電子図書館時代において司書は果たしてどうなるのか、どういった位置づけに置かれるのか…何故図書館に司書という専門職が必要なのか、それを説明する必要に迫られる時期がきているのではないかと思います。豊中を含む大阪府でも昨今図書館事情が大きく変わり、これからさらに変わっていくのではないかと日々感じています。

まだまだ日の浅い私が、司書を目指す皆様にお伝えしたいのは、常に知的欲求を持って、社会の現状を見つめて欲しいということです。図書館はあらゆる「知りたい」に応える場所です。それを実現するためには、今世の中でどういうことが求められているのかを知ることが必要です。資料を通じて人を支える、そういった司書になるべく私自身努力していきたいと思えますし、この体験記が、読まれた皆さんにとって司書のあり方を考える契機になれば幸いです。